

薰箱錄

留

增
775
36

4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 190 1 2

4曾
775
36

董荷錄卷之拾壹

目錄

日本奇跡考

日本事事蹟考



蕙嶺碑考五拾四

中村直道輯録

日本奇跡考

淡路子岩古岩



神代よりめてけし二宮考岩原よせしゆふこし
子岩古岩よりりりふし云今も地蔵寺

存藝玉依伯洞雲寺金忌水

赤岩寺中へ金忌神所依伯原はり市のちまうはりは地
水よりなる林をてしるぬい雲よりけりふなるははく

淡路木戸加岩谷石佛

さぬき寺やうは岩谷の観音、南西のれあへは平の太
の石塔観世寺并は法仏のつらと現す是弘法大師の

各号一子校と風吹散すれ少きなり

松別大坂と梅宮塚

若し今よむことい何れと書る初心

山別宇治川堂殿

宇治宇治のあたる河原の年々日こころは数万の衆
集りて先ぬあつそひまうりて歎ふ

此後玉焼大杉現

徳別湯あふ後里歌あ回大焼ち程現河上流其の船風波の
誰かああ村主歌されは白利生有波海と大あつそふ

伊勢白子のあひの橋

皆別女産歌白子浦ち家村白子山祝書ちの意ふあひの橋と
写書よ歌とくねたあ古あよ

想あつしつと梅の花るれちるる人さあつあつ

情別非ぬ並木れ

いめぢの並木れかかれてい又生て書氣とかなる

か賀玉解あ

聖別社宮の河也く宮守の宮あり友百日のるるあつあ
あつ解あつあ

濃別舎仏川

尖濃玉谷歌よ長ねあつとらり祝書と書話の流る河あり
ま中よる信ちこの信ありと書仏橋と書は其の人ける信よ
向てと書けられは河ありと書くならて一と汁沸あつる

侍長玉貝石

侍長玉貝石の祭屋京村の少くは貝石ありと書京屋

入る依りもある

家別依り浦赤夷貝

和歌山依り浦赤夷の社と建三——主夷と米ゆりふくま
おの貝夷のち乃ごこしくに依り

女藝者為の文家一貝

女藝者為の給貝一主のわらう瓜うりすおの貝と松つる

り波玉符貝

り波海那あると貝一符の字あり

徳別松浦赤夷すれ貝

さぬら松山の松浦赤夷貝一赤徳流びやう流されりひり
け浦も海河りて

松山の松浦風吹くせむいろと一のくゑりすれりひ

きよねい酒の目々松の家浦の字あり

いらいそ一の歌はねまよのせしきおのぎと記す

きよあや依り百戸漢

うさよおむらえんありつづきの付きいりるりとうす

大孝天加てけ滝

大さのき別去神ちの滝死赤くそ路をこに四依り歌原

甲村七福寺長慶六年一月二日とく

鏡前玉元東汚鬼

百金若大匠を流したりあし今もへつれが鬼かて也と云
是か府が紀とらあり

奥別山中不動寺石材木

首奥別山中の不動寺建立のたけ、材木をわつりて大

小の家本角丸と分るる

七別長柄七不之辰

七別長柄七不之辰

- 一 夫能就能夫と大なる二回時、海より能就あり
- 一 湖中かくかくとまじり、塩の油干し能減す
- 一 丑時、流る 丑の時、流るあり
- 一 午時、毎 午の時、毎あり
- 一 初不ちとつたちとつたちとつたのふんを扱とて、夫のふんとつたつたふんを扱とて
- 一 今不とつたつたつたつたの扱とて
- 一 ふつと減るありて、治せ早くと減せ

信別流汚の注七不之辰

一 社壇の 毎と別とありあり

一 扱入扱 扱入扱とつたつたつた

一 氷橋 氷橋ありありと扱とつたつた

一 湯口あり 温泉ありありと湯かありあり

一 七段床七年と一夜の条ありありと床を走りて能減す

一 ちんちんのまじり善賢堂と扱とつたつた

のまじり善賢堂と扱とつたつた

一 流汚 流汚ありありと流汚ありあり

流汚の海ありありと流汚ありあり

流汚の海ありあり

あきのふ山ありありの流汚ありありと流汚ありあり

あつて流りおま湯の川増くまけりむせ湯の多物
こふめ多湯くーこんを流る一湯も流らず所をのトと
くーとこさり

ろん林人村松樹 ロインキ

ろん林人村松樹を系樹の系弓かよと文と

周防徳子歌岩田山系系林 徳子

猿人まあところもの下らせびまをわがきれい白鳥

本松子 周防徳子歌岩田山系系林をわがきれい白鳥

松別湯湯池行目矣

松別湯湯の池の程新ま介小英皆行目之

ろん寺河毒あり

ろん寺河毒ありの海山の禁也一里のりくく遊水あ流る

母ておんけ下の民あつちをひらふ

揚子長武村吉中報

揚子長武村吉中報を報をく

そあ親旅歌蛙くく

そあ親旅歌蛙くくの多田の蛙歌万畔と瑞を報ふ

女門玉平家解

元暦二年育はる平家老のふ書る矣て河記す七果柳成

長利書 長利書がきか今やしてせれきて流のあはれ沈むるを

こよのりれり沈む君を名とるむつらもどの実也

渡川西のまうい

あはれは外流を流りの所渡川の河也とてた瓦ち布あいて
このまあへらさ入るま員との妨せびあはれま員との妨

と号のけいせいの歌

このとがくまをいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ

北河津の四谷送流

北河津の浦に舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ
或いは海に舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ
流の浦に舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ

北河津の雄淵

北河津の雄淵に舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ
舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ

北河津の舟

北河津の舟に舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ
舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ

舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ
舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ

江島池

江島池に舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ

北河津の舟

北河津の舟に舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ
舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ

北河津の舟

北河津の舟に舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ
舟をいふとあつたうまをいふてあつたうまをいふてあつたうまをいふ

赤福ち松実

流の赤福ちち序松ありきうて赤も實も他は是なり此の
地はうりうり生むる

栢列松橋

此流の赤は流ありありなつて赤流と云はれなり

重直ち弘法傍る

河波瀬波の境の言ふ赤山と云ふ赤直ちと云ふは此の樹
林は弘法傍るなりと云ふ

直江志賀庄河一松

一木の松と云ふありは松と一葉と云ふなり

河波田法苑の神社

河波津流の赤松の果赤りと云ふは此の赤と云ふ

河列橋浦馬石

河波勝浦あり馬のこゝ

五列三橋

三橋ち取津の面是言也。治正年中、此流て出流す。此
と云うて、赤ありありと云ふは、河波直江の三橋
ありありと云ふは、此の

貴宗園神田浦の知火

貴宗園神田浦の知火、此の秋、中流に赤ありあり
あり。此の神田浦の中、此の神田のこゝ、大石の神ありあり。此
田浦の石のうらうらの赤ありあり。大石の神ありあり。

赤福の紅葉

六年八月、必ず赤き紅葉あり。合色も赤なり。平河

のまゝに於て松竹のついでにちびちびのまのこゝろ

小文持所一多舟

笑話の伊豆より百里程未申の言しあしむる言ひ日むの
華大程のこゝろははらり常々念にこゝろと念ふのこゝろ
そこのこゝろの言ひは芥のぬゝ

中国大社

ゆはち無用坊主門より

宰府さくら

後帝國宰府の篠栗の一年と二夜なるをサシノイの葉
樹なるかゝりかゝり能國のよ

はくく人そこのこゝろさくらさくらさくらさくらさくらさくら

伊豆五十六日樹

伊豆の島那山越村の思ふ山山のついでは毎年三月十六日の花さ
く樹あり人呼て十六日樹と云

樹のち樹二程坊大

ち樹ありありの夜ありてちのや一竹は屋の極
こゝろ

紀州古座の村

紀州古座の村と云ふは毎年三月十六日必チ還ルの
紀州古座の村と云ふは毎年三月十六日必還ルの

古座の村

古座の村と云ふは毎年三月十六日必還ルの

古座の村

古座の村と云ふは毎年三月十六日必還ルの
奥門チと云ふは毎年三月十六日必還ルの

月詔玉之浦大助の由

月詔玉之浦大助仁信乃之浦大介義昭が菩提寺あり子孫仁信
入江源次再興建三す源次あり号す之浦大介甲冑あり
信胃を風種令より名に巻なりささくあり塔て寺室
より源次ハ之浦大介久の法名あり

同玉之浦大助の由

同玉之浦大助の由ハ之浦大介義昭が菩提寺あり子孫仁信
入江源次再興建三す源次あり号す之浦大介甲冑あり
信胃を風種令より名に巻なりささくあり塔て寺室
より源次ハ之浦大介久の法名あり

安藤全教の由

安藤全教の由ハ之浦大介義昭が菩提寺あり子孫仁信
入江源次再興建三す源次あり号す之浦大介甲冑あり
信胃を風種令より名に巻なりささくあり塔て寺室
より源次ハ之浦大介久の法名あり

あつちの由ハ之浦大介義昭が菩提寺あり子孫仁信
入江源次再興建三す源次あり号す之浦大介甲冑あり
信胃を風種令より名に巻なりささくあり塔て寺室
より源次ハ之浦大介久の法名あり

うらたの由ハ之浦大介義昭が菩提寺あり子孫仁信
入江源次再興建三す源次あり号す之浦大介甲冑あり
信胃を風種令より名に巻なりささくあり塔て寺室
より源次ハ之浦大介久の法名あり

信成帝天の鬼持

信成帝天の鬼持ハ之浦大介義昭が菩提寺あり子孫仁信
入江源次再興建三す源次あり号す之浦大介甲冑あり
信胃を風種令より名に巻なりささくあり塔て寺室
より源次ハ之浦大介久の法名あり

月詔玉之浦大助の由

月詔玉之浦大助の由ハ之浦大介義昭が菩提寺あり子孫仁信
入江源次再興建三す源次あり号す之浦大介甲冑あり
信胃を風種令より名に巻なりささくあり塔て寺室
より源次ハ之浦大介久の法名あり

石川の河上波定るけりまづ波うつて敷あゝ矢つりまり礼
合てささぐさ中よ就とかり矢取を奪ふ向てうごす珠
の矢よりわつては矢をまさりけりまづ河上を奪て矢天
よ飛つらるまを忌懼のごとくま中よ矢らん由は矢就と
なりて天よの御り也

河内野上矢就

因防玉御と云く就就と云るゆゑ昔明徳年中紀伊の長軍
中と河内野上大田取らるるなりては中よ下巻一然也三社を
建立し御りに毎年換月毎に石川よ就就と上る御方
にまづ河内山と云ふ山と夫の如く就就の如く人け火を御りて
越年し

肥前高良温泉湯中ま

温泉の熱湯よま由一人石川波のまひとま

佐々木温泉

但馬小坂所於温泉は温泉汗多し熱症を治し瘡を療
ま吉野温泉湯治ありまよつてよの温泉と云ふ湯と云
ま傍よまの温泉と云ふたは病多きて病を治す

標津温泉と云ふ

標津温泉の温泉の由は人界の泥水沸か毒ありま然
まあれを飲てこころくたす

雲州玉造の熱湯

雲州玉造河内の中よ三層より熱湯沸か悪人け河を
河内河内北流して急熱湯の中よ毒入りまを
病とま

高村蟹

同國西生郡中浦河より享祿年中細川右衛門尉人
高村氏より款二人を遣はしとんで河より入るに於て河
の蟹の甲より人の思ふ如く教あり

長谷川

同本多郡赤松村長谷川を長谷川といふ同故郷と云ふ也
ゆすも故郷といふも向て是を為す故郷といふも他あり

故郷神社

日誌所載今西村より延祿式より故郷神社あり此社
名抄より松根といふなり社家流より松根大田社一也本
系春日大田社といふ社初て流石の所より氏記の上より
わたりありともとありてあり新友流よりなりて是を

つまむ松の葉といふは今細の地名も松本村といふは松本
も松根社といふなり社記也

柳のづゝ神のふらりりり此に収る松のちぞきりり

いせ志熊川片枝の松

伊勢志熊郡若生浦松根の松葉いせ松の松が葉より片枝
の松といふは片枝の松ありてはしをうむりものつ
も是よりい

伊豆熱海郡松

伊豆熱海郡熱海松葉いせ松の松葉いせ松の松が葉より
熱海といふは熱海といふは熱海といふは熱海といふは
の松といふは松の松といふは松の松といふは松の松
あり郡松といふは松の松といふは松の松といふは松の松

豊後府内百令者大臣塚

豊後府内百令者大臣の塚として名高き者ありと云
如く亦府内村にありしと云ふあり

中村直道の所記と云ふと云ふありてこれと云ふ一也
りの考案の一即ちもやそもたしぬ

宝永六世曆七月廿日寫し全不有於是信佗日備於辨
論爾

松田秀誠書

以寺中本天文六年十月廿二日の表六つより字義し
り何と云ふなり

中村直道藏本

薰菴録卷之五拾四

薰菴録卷之五拾五

中村直道

日本國事跡考

歴代執政

神武 アマノノコ 天種子命 アマノタマシノミコ 天富命 アマトミ

綏靖 スヱイセイ 湯彦友命 ユヒコトモ

安寧 イツネ 出雲色命 イツネノシロ 大弥命 オホヤ

懿德 イデ 出雲色命 イツネノシロ 大臣

孝照 コウショウ 出雲心命 イツネノココロ 大臣 羸津世襲命 ヲキツヨシノ

孝安 コウアン 出雲色命 イツネノシロ

孝靈

大水口命 大矢口命

孝元

援鬱色雄命大臣 大縁押命

開化

大綜押命大臣 武建命 大峰命

崇神

伊香色雄命大臣

建膽心命 多辨命 安毛建美命

垂仁

大新河命大臣 十市根命

景行

武内棟梁之臣

成務

武内大臣 物部膽吐大臣

仲哀

武内 大伴武持大連

神功

武内大臣 物部多遲麻連公大連

物部五十琴

應神

武内 物部介葉連公大臣 太山守命

仁德

武内歷仕六朝壽三百餘歲

物部大別連公 倭立祖麻呂

履中

平群木菟 蕪我滿知 物部伊久佛

葛城圓大連

及正

葛城圓

允恭

大伴室屋大連

安康

葛城圓大臣 大伴室屋大連

雄略

平群真鳥大臣
物部自連

大伴室屋大連

清寧

平群真鳥大臣

大伴室屋大連

顯宗

平群真鳥大臣

大伴室屋大連

仁賢

平群真鳥大臣

大伴金村大臣

武烈

大伴金村大連

繼體

巨勢男大臣

大伴金村大連

物部麤鹿火

安閑

大伴金村大連

物部麤鹿火

宣化

蘓我稻目大臣好佛

大伴金村大連

物部麤鹿

欽明

蘓我稻目大臣

大伴金村大連

物部尾輿

敏達

蘓我馬子大臣

稻目子與麤戶
皇子共好佛

物部弓削守屋大連

排佛

用明

蘓我馬子大臣

物部弓削守屋大連

崇峻

蘓我馬子大臣

推古

厩戶皇子

蘓我馬子大臣 蘓我蝦夷

舒明

蘓我蝦夷

皇極

蘓我蝦夷

有反心與子入鹿同伏誅

孝德

阿倍倉橋左大臣

藤原山田石河麻呂右大臣

巨勢德左大臣 大伴長德右大臣

中臣鎌子内臣

齊明

巨勢德左大臣 中臣鎌子内臣

天智

藤原鎌足鎌子也内大臣

大織冠

大友皇子

太政大臣 不克而薨 與天武爭位 大友者天智長子也

天武

藤原赤兄赤兄左大臣 中臣金連右大臣

持統

高市皇子太政大臣

多治比嶋真人右大臣

文武

多治比嶋真人右大臣

阿倍御主人右大臣

刑部親王知太政官事

石上麻呂 穗積親王知太政官事

元明

穗積親王知太政官事

石上麻呂左大臣

藤原不比等右大臣 公撰律令 鎌足子 藤原不比等右大臣

元正

石上麻呂左大臣 藤原不比等右大臣

聖武

舍人親王

知太政官事 有文才撰日本紀三十卷自神代至持統

長屋王 右大臣

舍人親王 知太政官事

長屋王 左大臣

藤原武智麻呂 右大臣

不比等 子

鈴鹿王 知太政官事

橘諸兄 右大臣

撰萬葉倭歌集

孝謙

橘諸兄 左大臣

藤原豐成 右大臣

藤原惠美押勝 太保

武知奪子

廢帝

藤原惠美押勝 太保

謀反伏誅

藤原豐成 右大臣

道鏡禪師 大臣

稱德

道鏡禪師

太政大臣 下野國 遂死

稱德崩後配流

藤原豐成 右大臣

藤原永手 左大臣

吉備真吉備 右大臣

掌為遣唐使受

光仁

藤原永手

左大臣 永手有翼戴之勲 稱德崩光仁龍潛

吉備真吉備 右大臣

大中臣清麻呂 右大臣

藤原魚名 左大臣

桓武

藤原魚名 左大臣

藤原田麻呂 右大臣

藤原是公 右大臣

藤原繼繩 右大臣

撰續日本紀自文

神王右大臣

平城

藤原内麻呂右大臣

不比等曾孫

嵯峨

藤原内麻呂右大臣

藤原園人右大臣

藤原冬嗣右大臣

内麻呂子

淳和

藤原冬嗣右大臣

藤原緒嗣右大臣

仁明

藤原緒嗣左大臣

清原夏野右大臣

藤原三守右大臣

源常右大臣

橘氏公右大臣

藤原良房右大臣
冬嗣子

文德

源常左大臣

藤原良房右大臣

源信左大臣

清和

藤原良房

攝政太政大臣
良房以外祖故攝政

清和幼冲
諡忠仁

公源融左大臣

藤原基經右大臣

陽成

藤原基經

攝政關白
成不修德基經因霍光故事

廢之二世相續有勲業故子孫皆執朝政
藤原氏繁榮
自是藉甚

藤原基經關白太政大臣

光孝

藤原基經

關白太政大臣

宇多

藤原基經

關白太政大臣

藤原良世右大臣

源能有右大臣
有文武才

醍醐

藤原時平左大臣

管原道真右大臣
為時平

被譖配流於太宰府而薨
即北野天滿天神是也子孫世續儒業

源光ミチ右大臣 藤原忠平右大臣

藤原定方右大臣

朱雀 藤原忠平左大臣 藤原定方右大臣

藤原仲平右大臣 藤原恒佐ツネサ右大臣

藤原實賴右大臣

村上 藤原忠平太政大臣 謚貞信公

藤原實賴左大臣 藤原師輔シホ右大臣

藤原殿顯忠右大臣 源高明タカアキラ右大臣

冷泉 藤原實賴関白太政大臣

圓融 藤原實賴攝政 謚清慎公

藤原伊尹イノ攝政 謚謙徳公

藤原兼通関白 謚忠義公

藤原賴忠関白 謚廉義公

花山 藤原賴忠関白

一条 藤原兼家攝政 藤原道隆関白

藤原道兼関白 藤原道長左大臣

三糸 藤原道長左大臣

後一条 藤原道長攝政 富貴榮輝号御堂殿 祢之号

藤原賴通攝政 号宇治殿

後朱雀 藤原賴通関白

後冷泉 藤原賴通 関白

後三条 藤原教通 関白

白河 藤原教通 関白 藤原師實 関白

堀河 藤原師實 攝政 藤原師通 関白

鳥羽 藤原師通 関白 藤原忠實 関白

崇德 藤原忠實 攝政 号富家殿

近衛 藤原忠通 攝政 有文才善作詩

後白河 藤原忠通 関白

後白河 藤原忠通 関白

後白河 藤原忠通 関白

二条 藤原基實 関白 号近衛殿

六条 藤原基實 攝政 藤原基房 攝政 号松殿

高倉 藤原基房 攝政 藤原基通 関白

安德 藤原基通 攝政

後鳥羽 藤原師家 攝政 藤原基通 関白

土御門 藤原兼實 攝政 号月輪殿

順德 藤原家實 関白 藤原良經 攝政

院帝 藤原道家 攝政 号光明峰寺殿 一家

院帝 藤原道家 攝政 号光明峰寺殿 一家

院帝 藤原道家 攝政 号光明峰寺殿 一家

後堀河 藤原家實攝政 藤原道家関白

藤原教實関白 号九条殿

四条 藤原教實攝政 藤原道家攝政

藤原兼經攝政

後嵯峨 藤原良實関白 号二条殿

後深草 藤原實經攝政 号一条殿

藤原兼經攝政 藤原兼平 関白 号鷹司殿

近衛殿九条二条一条鷹司謂之五攝家

此後代々雖有執政攝政関白之名而實其權移于武家

平清盛 桓武帝之後也其先祖世有軍功至

清盛事後白河二条六条高倉安德五朝官

位甚盛遂任相國為帝室外戚威權大振自

茲朝廷恭己武家秉柄清盛薨其子宗盛嗣

為頼朝被滅

源頼朝 清和帝之後也其祖頼信頼義義家

三世相續討逆賊大有武功頼朝年少時為

清盛被逐挾居於伊豆國安德帝治承四年

頼朝起兵討平氏遂滅之并領六十餘州任

征夷大將軍居相別鎌倉治世二十年

源賴家

賴朝長子也外祖北條時政執權賴家治世三年時政廢之立實朝

源實朝

賴朝次子也外祖時政立奉之時政老而其子義時執權實朝治世十七年為賴家子僧公曉被刺而薨義時討殺公曉

藤原賴經

朝廷執政藤原道家少子也道家母者賴朝之姪女也實朝暴薨無後故義時與賴朝大

夫人平政子義時相議迎賴經立之為鎌倉主將指揮闔國義時卒子泰時執權泰時性寬厚能政事人皆懷之泰時卒嫡孫經時代之賴經治世十八年傳位於賴嗣

藤原賴嗣

賴經子也北條經時及其弟時賴相續執權賴嗣治世八年有故而辭位

宗尊親王

後嵯峨帝之皇子也賴嗣辭位北條時賴奏朝廷迎宗尊親王為主將時賴卒其子時宗

執權宗尊治世十五年傳位惟康親王
惟康親王

宗尊之子也北條時宗執權時宗卒其子貞
時代之惟康治世二十四年有故而避位

久明親王

後深草帝之皇子也惟康避位北條貞時迎
立之久明治世二十年讓位於守邦

守邦親王

久明之子也北條貞時卒其子高時代之自
時政至高時執武家之權八世闔國無不畏

服高時暴虐

後醍醐帝討之不克

乘輿

西狩於隱州經歲楠正成赤松圓心等起勤

王之師源尊氏又起兵源義貞勃興於上州

攻入鎌倉誅高時滅其族於是守邦廢位凡

治世二十五年右鎌倉主將自賴朝至守邦

九世大凡百五十四年

源尊氏

清和帝之後與賴朝同祖以足利為氏號而

世為鎌倉甲族北條氏滅後尊氏有寵於

後醍醐帝領關東八州兵威強大遂叛干

朝廷與源義負楠正成等相戰數年王師遂潰
源氏自稱征夷大將軍漸復賴朝之旧業
居山城之京都統制諸國治世二十五年

源義詮

尊氏嫡子也代尊氏襲位治世十年

源義滿

義詮子也幼嗣位細川賴之輔佐之義滿生
長有才智闇國悉服威權過於父祖其儀制
擬王室使斯波氏細川氏畠山氏相代執政
世号三管領使山名氏一色氏赤松氏京極

氏相代掌刑法世號四職云云義滿後改名
道義治世四十一年

義持

義滿子也治世二十一年

義量

義持子也義持老後義量在位三年先義持
而薨

源義教

義持弟也義量早世故管領畠山滿家等奉
之以爲義持繼嗣治世十四年爲強臣赤松

滿祐被弑細川持之大内持世等誅滿祐奉
義勝立之

源義勝

義教子也幼嗣位治世三年

源義政

義教次子也代義勝襲位治世四十九年此
時權臣山名宗全與管領細川勝元爭威令
戰于京中殆十年諸國武士相分屬之義政
不能制之自茲國郡兵乱不止

源義尚

義政子也義政倦於政勢傳位於義尚在位
十七年先義政而薨於江州軍中

源義植

義尚從弟也義政有二弟曰義視曰政知義
視子曰義植政知子曰義高及義尚薨而義
政養義植義高爲子義政薨義植嗣立細川
政元廢之立義高其後大内義興奉義植後
位前後治世合十八年義植一名義材又名

源義高

義尚從弟也逐義植代之其後失位薨於江

州九治世十四年義高一名義澄

源義晴

義高子也義植迎之為養子嗣位治世三十年為強臣三好長慶被逐薨於江州

源義輝

義晴子也代義晴據位十六年為三好義繼松永久秀等被弑織田信長討三好松永使義輝弟義昭襲位然不才而廢

右京都主將自尊氏至義輝十三世大九二百三十一年

平信長

清盛之孽孫也世居尾州號織田氏初源義政以來國郡騷亂不止信長出兵并吞三十餘州居江州安土其威振於諸國天正十年六月信長寓于京師為其下明智光秀被弑

豐臣秀吉

尾州人也不知其所生初為奴隸經歷近國既仕信長登庸日進屢有武功為方面之將天正十年六月誅明智光秀以報君仇於是兵威大強遂統領六十餘州自補関白職以

施政令於諸國廷臣武士無不_レ畏服治世十
七年居攝州大坂城移洛北聚樂晚築城州
伏見城居焉

文人

大友皇子 大津皇子 此二皇子本朝詩賦之祖

舍人親王 肖奈行文 粟田真人 入唐著名

安倍仲丸 李白所謂日本晁卿是也自唐歸時

丹墀廣成 藤原繼繩 仲雄王 巨勢識人

小野峯守 朝野鹿取 勇文繼 桑原赤

紀末守 坂今雄 坂今繼 滋野負主

良峯安世 菅原古人 菅原清公

中科善雄 藤原是雄 藤原冬繼 多清負

錦茂公 藤原冬嗣 佐長繼 野年永

宮村繼

桑廣田

滋野善末

源弘

惟良春道

三原春上

藤三成

朝原道永

石上宅嗣

淡海三船

藤常嗣

笠仲守

嶋田清田

高村田使

和氣廣世

賀陽豐年

藤衛

南淵永河

淨野夏嗣

石川廣主

淡海福良

大枝直臣

紀長江

藤令緒

源明

橘常重

安文繼

楊泰師

治文雄

豐前王

小野篁

治穎長

山古嗣

金雄津

常光守

大枝永野

巧諸勝

伊永代

南洲弘負

路永名

紀虎繼

伴成益

文直室

石越知人

野末嗣

鳥高名

藤関雄

菅善主

中良舟

中良楫

菅清因

野春卿

猪善繩

枝磯麻呂

都服赤

坂田永河

紀御依

清原真友

惟高親王

大江音人

菅原是善

善讀文選

都良香

春澄善繼

橘廣相

菅原道真

惟良高尚

嶋田忠臣

小野滋陰

藤原直方

平惟範

藤原滋實

藤原定國

橘公緒

藤原如道

源湛

藤原老快

藤原有頼

紀長谷雄

善讀漢書

三善清行通番教 高階義範 藤原管根

小野義材 橘澄清 平有相 三統理平

物部安興 大江千古 紀淑光 笙笠夏蔭

大藏善行 大藏是明 是貞親王 田達音

藤原春海 紀淑望 大江朝綱 都在中

橘在列 兼明親王号中書王 菅原淳茂

大江澄明 藤原雅材 泰氏安 藤俊生

大江維時 藤原博文 橘直韓 菅原文時

高五常 源英明 源順 具平親王圖後中書王

大江以言 藤原篤茂 藤原倫寧 平兼盛

三善道統 巨勢為時 播磨淑信

田口齊名 藤原廣業 菅原輔正

大江舉周 宮地義行 文室如正

藤原行成 源為憲 藤惟成 菅原雅規

紀在昌 高積善 高岳相如 源相規

源道濟 藤原行葛 菅原雅熙 橘正通

慶滋保胤 大江匡衡 大江時棟

櫻嶋忠信 藤原衆海 藤原憲光 藤原尹經

藤原仲實 惟宗孝仲 三善為康

藤原公任 藤原敦光 藤原茂明

藤原忠平 藤原兼輔 源宇于

九河内躬恒 壬生忠峯 坂上是則

春道列樹 紀友則 藤原興風

紀貫之撰古今和歌集 清原深養父

文屋朝康 源等 平兼盛 壬生忠見

清原元輔 藤原敦忠 藤原朝忠

藤原伊尹 曾祢好忠 惠慶法師 源重之

大中臣能宣 藤原實方 藤原道信

藤原公任 藤原道雅 藤原定賴 僧行尊

能因法師 良暹法師 源經信 大江匡房

源俊賴 藤原基俊 藤原忠通 源兼昌

藤原顯輔 藤原實定 道因法師

藤原俊成 藤原清輔 俊惠法師

西行法師 寂蓮法師 藤原良經 源實朝

藤原雅經 僧慈圓 藤原公經 藤原定家

藤原家隆

右歌人之尤也其外不可勝記

善書

吉備大臣

嵯峨天皇

淳和天皇

亭子皇子 僧空海 藤原敏行 橘逸勢
小野道風 若愚 藤原道長 藤原佐理
藤原行成 世林 世尊寺流 兼行 藤原公任
源俊賴 藤原良經 藤原行能 藤原行尹
僧俊苜 僧尊圓 伏見院帝

才女

衣通姬 陸奧米女 石川郎女
有智子公主 善屬詩文 小野小町 伊勢
紫式部 和泉式部 赤染右衛門

左衛門佐局 伊勢大輔 大貳三位
小式部 周防内侍 江侍從 菅孝標女

清少納言

此等婦人皆能倭歌或撰倭字書其餘猶多

良將

小野東人 坂上 苅田丸 坂上 田村丸
文屋綿丸 藤原利仁 藤原秀卿 平貞盛
橘遠保 平惟茂 源賴信 源賴義
源義家 平正盛 源義朝 源賴政

源為朝	平重盛	源義平	源義經
源義仲	平教經	北条泰時	新田義貞
楠正成	楠正行	赤松圓心	源顯家
源義興	菊池武重	菊池武光	足利基氏
高師直	足利高經	仁木義長	細川清氏
桃井直常	細川賴之	山名氏清	
大内義弘	畠山基國	小笠原政康	
北條早雲	北條氏康	武田信玄	
長尾謙信	毛利元就		

此外最多今不具錄

勇士

野見宿禰	渡邊綱	藤原保昌	平致賴
藤原季方	鎌倉景政	平家貞	鎌田政家
齋藤實盛	土肥實平	金子家忠	
熊谷直實	佐々木秀義	三浦義明	
三浦義澄	和田義盛	朝夷名義秀	
千葉常胤	畠山重忠	梶原景時	
大庭景能	佐々木定綱	佐々木盛綱	
佐々木高綱	加藤景康	平山季重	
足利忠綱	平景清	佐藤忠信	那須宗高

小山朝政 結城朝光 曾我祐成

曾我時宗 仁田忠常 五郎丸 泉親平

宇都宮公綱 長崎為基 長崎高重

陶山義高 村上義光 名和長年 畑時能

粟生氏 篠塚氏 藥師寺公義 土岐頼遠

本間資氏 結城氏朝 柴田勝家

瀧川一益 黒田如水 加藤清正 号主計頭

小西行長 号攝津守

古今勇士不可枚舉今記其万之一

右古今人物所熟諳者粗表章如此歷代之多

士濟々不遑詳記且忠臣孝子貞女之昭々于世者欲列之然行人急發無奈之何

費邦

本朝修聘振古矣然三百年以來以文字通者或浮屠多爲之彼瞽於國史何得知哉山川節序等亦然今因其所請而四五日之間少抄及此耳

五畿内五箇國

山城國 王都曰平安城 鴨河自北山流出

與白河合共委干淀 大井河自丹波流出經

葛野曰葛野河經桂里曰桂河遂達于淀鵬河
在王城尤大井河在右 音羽山在城東有瀑
布有寺曰清水將軍坂上田村凡建之昔有隱
者行睿結草庵於此人不知其歲後不知所往
浮屠推之爲觀音化現神樂岡在音羽山北ト
部氏崇諸神於此所其麓有吉田社神樂東南
有山科昔葬天皇處也有寺曰安祥山科
東一里許曰相坂 王城西二里許曰嵯峨野
其西有愛宕山與高雄山相連昔榮術太郎所
栖也高五十町六十步餘麓有河曰清瀧 高

雄西北曰柵尾柵與梅字通用地產茶後產于宇治者
爲嘉品產于柵尾者爲煎茶嵯峨邊有大秦寺
一名廣隆寺昔秦徐福來日本其子孫皆稱秦
氏秦河勝居此所故号曰大秦 王城大內有
神泉苑以爲靈沼天皇時時行幸遊慰若旱祈
雨有驗
大和國 自神武天皇至光仁天皇歷代以爲
都号曰平城一名寧樂 一作奈良州有多武峯
大織冠鎌原鎌足及子贈相國淡海公不比等墓有
焉建祠安鎌足像鎌足姓中臣居州之藤原故

天智天皇詔，改爲藤原姓。是藤原氏之元祖也。
葛城山有神，自一言主神昔有役處士者住
此山，得道術，使令鬼神採薪汲水，自葛城蹊，金
峯山路甚險，修驗者患之。處士使一言主神夷
其路，神倦怠處，叱之神懼，治之。往來有使，金
峯山與紀伊國相接。吉野山甚深廣，櫻花多，
盛爲扶桑第一。見者以爲白雲。龍田河秋風
吹，楓葉漂流，滿川皆紅。見者以爲濯錦。三輪
山一名三諸山，大物主神之所栖也。以杉木爲
主。

河內國 交野昔天皇遊獵之地也。與禁野並
稱。金剛山元弘年中判官楠正成，構壘於此，爲
敵愾之舉。東軍十數萬圍之，攻之，遂不克。敗走
正成，武名勇功大顯。俗号其壘曰千劔破城。
和泉國 大鳥社昔神化爲白鳳來集，故立社
祭之，号曰大鳥。

攝津國 膽駒山，厩戶皇子之子山背大兄王
爲蘓我入鹿被攻，逃入此山自殺。神崎渡舟
之處也。與江口並稱。傀儡子遊女在此地留旅
容。難波此即今大坂也。昔仁德天皇爲太子

時百濟國王仁持論語來教之然詠倭歌以
勸即位世傳以為盛事其歌詠梅得比興之
義難波者太子之所居也 住吉社祭表筒
男中底筒男三神共海童也後合天照大神
神功皇后崇之為五社有松林 兵庫一名
武庫或作務古武庫西有有馬山有温泉浴
者除疾病有瀑布其聲如鼓故号鼓瀧 福
原平清盛築別業於此地治承年中奉安德
天皇遷都於此不幾後歸平安城
東海道十五箇國

伊賀國 天照大神齋宮初建于此而後移於

伊勢

伊勢國 度會郡有两大神宮所謂内宮外宮

是也有川名五十鈴又曰御裳濯事跡甚多
鈴鹿山昔有賊出沒如鬼將軍坂上田村
丸奉勅討滅之以其隘故置関坂下有小河
八十故号八十瀬

志摩國 有伊雜宮為伊勢大神之遙宮

尾張國 熱田社景行天皇子日本武尊自東
征歸至此留靈劔故崇之曰說曰秦徐福來

于此求藥故世号熱田曰小蓬萊

參河國 杜若澤有八橋在原中將業平來此

處詠倭歌 矢矯河建武年中源義負奉詔

東征與源尊氏兵戰于此 吉田有河自茲

渡舟涉伊勢

遠江國 天龍河其支流曰小天龍河面廣而

無橋土人棹艇渡旅客官家往還時架浮梁

潮見坂或曰二村峯也觀南海無山無鳴

洪波百尺

駿河國 大堰河爲遠江駿河之境時時每逢

風雨洲瀨不定渡則石啣足河東畔驛曰島

田屢爲水被漂而居亦不定然行旅逢水漲

以錢界土人以渡民得其利宇都山 在原

業平過此時楓蔦甚茂偶逢修行者詠倭歌

阿部河去府地一里許府中有神宮號曰

淺間堂自富士山遷之 富士山 扶桑第

一高山四時有雪絕頂有烟昔役處士登此

峯詳見都良香記世傳秦徐福浮海來於日

本遂留于此山以爲蓬萊山其名聞於中華

義楚六帖載之又洪武年中宋景濂作日東

曲以詠之且本朝詩人歌人題詠甚多淺間
明神之所居也麓有穴号人穴不知其深幾
許也其麓有河亦曰富士河急流甚險清
見関多胡浦與三穗松林相對阿部山中
有物號曰山男非人非獸形似巨木斷有四
肢以爲足木皮有兩穴以爲兩眼甲圻處以
爲鼻口无肢懸曲木與藤以爲弓弦右肢懸
細枝以爲矢下且獵師相逢射之倒之大恠
牽之觸岩流血又牽之甚重不動驚走歸家
與衆共往尋之不見焉唯見血灑岩石耳

黃瀬河治兼年中源頼朝發自鎌倉觀兵于
此時其第義經自奥州來謁蘆鷹山足柄
山共在富士之傍薩埵山下有海岸往來
者窺潮之進退以往避其波也觀應年中源
尊氏與其弟直義不善遂戰于此山真義敗
走草薙社日本武尊東征時賊放火於
廣野欲燒武尊武尊拔天叢雲劍握劍名十艾
薙之草偃燒賊故尊無恙因改名曰草薙劍
久能山甚險閣路羊腸九折盤四方孤絶
南則海岸也源義經曾以笛奉此山神多

胡浦聖武天皇時漁人於浦邊得沙金少許
即獻之 三穗松林茂樾昔神女飛來懸羽
衣於松枝漁人取之神女失衣不能飛屢求
之不肯為遂相約授衣神女悅而飛去其後
又來於是土人立祠奉之

甲斐國 新羅三郎源義光子孫分居此國者
號曰甲斐源氏州產馬每年八月貢之

伊豆國 三嶋有社祭大山祇神是山神也與
伊豫三嶋同箱根山有駒形神祠山上有湖
伊豆相模以此山為界伊豆海有大嶋昔役

處士小角遭讒謫此嶋後浮海入唐云云又
保元年中流鎮西八郎源為朝於此島 熱
海有溫泉有神曰走湯權現

相模國 小田原近世有北條早雲者居此城
兵威頗振於關東早雲姓平氏初號伊勢新
九郎及到關東慕昔時北條氏執兵權以自
号北條氏其曾孫氏政及子氏直天正十八
年為関白秀吉被滅 伊豆相模海上有鯨
魚長數丈每歲官船司使水手又之掛長繩
從其所往籍之牽之到陸齎之以入魚肆腥

油甚多 酒勾川在小田原東五十町 鎌倉源賴朝以來爲柳營居處 鶴岡在鎌倉東八幡大神是源氏所歸依也 鎌倉事跡最多不暇枚舉也 金澤越後守平負顯集倭唐群書儒書以黑印金澤文庫誌之佛書以朱印金澤文庫誌之本朝書籍亦貼墨印元弘兵燹之後總存者二百數十部

武藏國 平原廣野不見山千村萬落鷄犬相聞朝日夕日出波草際鸛鵠鳧雁充滿其中處處有沼產鯉魚嘉魚隅田川在武藏下總

之界水深有舟有鳥曰都鳥喙足皆赤形似鴨倭訓義好食蛤昔在原業平來過詠倭歌

安房國 有山傍海自武野望視此州之山上總國 平廣常爲此州司馬率兵二萬人迎

源賴朝其後遂被害時治承年中也

下總國 平將門居相馬郡義平年中謀反自稱平親王構殿舍崔禁中置百司與關東八州相約作亂詔使平負盛藤原秀卿討之遂族滅

常陸國 鹿嶋宮者武甕槌神社也古此神奉

天照大神勅與下總杵取神相共合力掃除
邪神歷代以其勲功故二神皆為大社古來
不殺鹿以神使故也 筑波山有茂林麓有
川有淵

東山道八箇國

近江國 比叡山日吉神之所栖也當王城之
東北俗謂之鬼門遂比天台山事跡繁多今
略之 州有湖甚廣大船往來自北國達大
津多產鮒魚有義味湖中有島曰竹生神仙
之所遊也湖形似琵琶故曰琵琶湖湖西流

最細處曰勢多架橋往還勢多少西入山城
國為宇治川勢多西南有山皆岩石故曰石
山 琵琶湖外別有小湖曰餘五 伊吹山
昔日本武尊歸自東征到此時山神化毒蛇
吐氣中武尊武尊驚汲水洗之而覺因呼其
水曰醒井

美濃國

稻葉山今名曰歧阜

南宮山有仲

山彦社 歧岨川自信濃歧岨山流出故名
又洲俣川黑瀨川皆同流也不破関之一也
青野原牛若東行時富賈吉次同往賊首

長範聚徒數十人謀于野夜入吉次宿欲盜其裝牛若拔釵斬之死者既十餘人長範異之自把炬火右手提長刀直入牛若挑長範雖竭力牛若輕捷長範腕廢棄長刀遂殪吉次大喜俱赴奥州牛若源義經之童名也

飛驒國 昔此州出良匠故號飛驒匠

信濃國 地高而寒群川之長大者其源多自此州流出歧岨山林木甚多大者數圍長者數丈土民戶戶白板扉屋四面皆板不塗壁裂大木為薪伐木者轉自山浮河以達諸國

諏訪有建御方神社號諏訪明神大己貴神子也此處有大湖冬冰厚然人恐陷焉一夜水一道峨峨然衆以為神初渡然後人馬往還如蹈陸路 戶藏山有手刀雄神社此神天照大神之臣也 姨棄山詠倭歌者以此山之月為吟料

上野國 碓日山昔日本武尊過此時向東曰吾孀依是倭語呼東曰阿都磨 利根川長流而大俗號曰坂東太郎

下野國 河內郡二荒山一名日光山又曰黑

髮山或曰別山也深山上有大湖其奧有湯
泉山中有栖鷹巢又有銅穴多出鑛宇都
宮神曰猿王即日光山神子也室八島池
中有八島祭八神世傳昔此州富人故於
庭池邊積薪燒魚故歌人執之以爲故事
足利行道山有源義兼墓小野篁掌居足
利其後就篁讀書處安先聖影教授者相續
居之東州人來學五經正義孝經論語孟子
註疏等有之欲見者來求不許外借俗推呼
爲足利學校源尊氏逃往筑紫與菊池戰于

多多良濱時默禱先聖像遂得勝依是造替
屋宇以崇奉也

陸奧國 白河関有秋風楓落之倭歌 衣河
源義經藤原秀衡所據也 熱借山逢隈河
俱是源頼朝與藤原泰衡合戰之處 松島
此島之外有小島若干殆如盆池月波之景
境致之佳與丹後天橋立安藝嚴嶋爲三處
奇觀 鎮守府以爲東國之邊徼故置府以
備警衛 南部產名馬 津輕昔有靺鞨船
來漂 金華山產黃金聖武天皇時貢之文

猷通考所謂東奥州產黃金是也 蝦夷島

船自松前渡行夷人皆長鬚放毒矢得禽獸嶋多不知其教遠行者見陽鳥之所居蓋與匈奴接云

出羽國 出鷲雕鷹羽故名昔每歲貢之繳以

以為箭括最上川有稻舟上下之倭歌 按

察使出羽陸奥皆有之秋田城此州之都會

也置介以治之

北陸道七箇國

若狹國 出羽越後之舟達干小濱昆布乾鮭

等為市後瀨山青葉山俱名所 遠敷大明

神社祭彦火火出見尊此神天照大神孫也

越前國 敷賀郡氣比大明神社者仲哀天皇

廟也有大宮司監之 金崎城建武年中尊

良親王及源義頭搦之足利高經等攻拔之

城中糧盡尊良義頭自殺尊良後醍醐天皇

長子義頭義負長男 足羽郡有黑丸城源

義負攻之城主高經拒之義負中流矢而死

荒血山木目山俱名所

加賀國 白山雪不消故名昔修驗者泰澄入

山訖感妙理權現出現曰伊弉諾神是也遂
立為大社 清和天皇時渤海使者來此州
即越平安城

能登國 石動山

越中國 礪波山有関

越後國 夜凡古山神有社 鳥坂城建仁元

年城小太郎資盛據城謀反佐佐木盛綱率
衆攻之互多死傷資盛姨母號坂額御前善
射假為童形結髮著甲居槽上放矢中之者
皆斃藤澤四郎在其後高處善伺射之洞坂

額股即什生捕之坂額被創後資盛敗北創
愈後將軍源賴家嫁坂額于淺利義遠

佐渡國 越後海上島也有銀山 兼久兵亂

時平義時遷順德帝于此島

山陰道八箇國

丹波國 大井河之濫觴在此州自山谷間駕
一葉到嵯峨其間有觀瀾盤陀浪花隈鳥船
灘氣象巖等之號皆近歲惺齋藤欽夫之所
題也 大江山其麓路曰生野通丹後昔山
中有鬼曰酒顛童源賴光渡邊綱等奉詔往

斬之ラ 篠村有八幡宮元弘兵革之時源尊
氏獻カク鎬矢カクヤ及願文曰大神聖代先烈之宗廟
源家中興之靈神云云

丹後國 天橋立一名成相一州之美景也嘗
有浮屠立文殊樓俗傳自海挑龍燈 與謝
郡水江浦島子釣魚騎龜到水府與女相約
歸時女界一筐教曰慎勿開浦島子歸故鄉
既經數百歲時人無知之者浦島子怪之閱
筐有紫白雲出自筐中即老死

但馬國 有温泉

因幡國 有山亦名因幡有松

伯耆國 大山是神靈仙人之窟宅也 船上

山後醍醐天皇自隱故逃來暫駐蹕於此伯
耆守名和長年奉之

出雲國 大社作大一祭大已貴神此神者素盞

鳥神娶稻田姬所生也地神之魁也其魂飛
遊入和州三諸山有國造監之 敷川上素
盞鳥神斬八咫大蛇處也嘗有八色雲氣故
爲國名素盞鳥大已貴事詳于日本紀
八重籬素盞鳥神之所棲也 日御崎社者

大社之離宮也

石見國 高角峰柿本人丸之所沒也 有銀山

文獻通考曰 西別島出白銀是也

隱岐國 產鯪魚味美 兼久兵革之時平義

時遷後鳥羽帝於此 元弘騷動之時平高時

遷後醍醐帝於此 隱岐海上有竹島多竹

多鯪味甚美 海獸曰葦鹿

山陽道八箇國

播磨國 須磨浦 蟹夫煮塩 明石浦有朝霧

鳴舟之倭歌 高沙有松 有川曰賀古一

名 鷓川 有野曰印南 肉粟郡出鐵 鍛作

刀 劔 苔繩山 元弘年中赤松圓心構壘處

也 室津往來大小船之所泊也

美作國 久米山 鹽垂山 在此國

備前國 昔備前中後為一國 號吉備國 今分

為三

備中國 吉備津宮神社 有釜若有事則自鳴

吼

備後國 鞆浦神社 功皇后繫船於此

安藝國 嚴嶋神社 祭市杵嶋姬 是素盞鳥神

之女也潮滿則葦表廻廊皆在海中潮退則爲陸地朝暮之晴天明月之夜真一方之佳景也俗號宮島平清盛爲安藝守時尤崇信之終身不變

周防國 山多材木 山口者大内氏累世所居也以勘合印通舟于大明九十年前大内氏滅亡之時勘合印爲兵火燒失

長門國 昔仲哀天皇西征之時居豐浦宮赤間關一曰赤目關赤目者鯛名也古有大鯛魚透過故名焉周防長門之界也 壇浦

文治元年安德帝爲源氏被攻所沉溺處也平族同溺死

南海道六箇國

紀伊國 日前國懸宮是神鏡之別也紀氏爲

國造監之有川曰雜賀有浦曰弱有濱曰吹

上有蘆葦有鶴 玉津嶋明神宮在弱浦是

允恭天皇妃衣通姬也 藤代松昔孝德天

皇子有間皇子自縊死處也 高野山昔有

明神與天野明神共守此山嵯峨天皇時沙

門空海住此山 熊野山日本紀云葬伊弉

冊尊於紀州有間村故祭其靈其子速王男
事解男合為三社或曰秦徐福率童男卅女
尋蓬萊遂留此後祭以為神故大明太祖
皇帝賦三山詩云熊野峯高血食祠松根瓊
珀也應肥當時徐福求仙藥直至如今遂不
歸依是本邦稱蓬萊者三處曰富士曰熊野
曰熱田浮屠入山以來呼本宮新宮那智
為三處權現那智瀧者扶桑第一之瀑布
也落處有淵不知其穴之深花山上皇曾來
浴此瀧水

淡路國

伊弉諾尊以矛探海其滴凝堅為此

即此

阿波國

勝浦源義經追擊平氏時到此浦喜

曰浦可也我必勝

國中有長河阿波海上

有鳴戶漸波甚急齊汨回旋舟到此多沒溺

讚岐國

屋嶋其形似屋故名大治元年源義

經襲屋嶋平氏敗北奔長州

白鳥明神社

祭日本武尊之靈

崇德帝與後白河帝爭

位時崇德失利遷于此國崩後立廟號曰白

峯

伊豫國 有溫泉 三島神社與伊豆同

土佐國 山多材木 元弘年中平高時遷尊

良親王於此

西海道九箇國

筑前國 太宰府置帥大貳少貳等以治之設

九州之警衛及異國襲來之備也延喜元年

菅原相依藤時平之諛尤遷為太宰帥作詩

曰都府樓唯看瓦色觀音寺只聽鐘聲三年

薨葬安樂寺後立天滿宮都府者都督府也

觀音寺亦在筑前 志賀嶋神是安曇明神

也 宗像社祭素盞烏尊之子 宇瀨宮神

功皇后生譽田天皇處也 箱崎有松林有

八幡宮祭譽田天皇也譽田即應神也 寶

萬嶽菅丞相登此祈天處也

筑後國 有一夜河千年河等之勝水

豐前國 門司關即赤間關之東岸也高處有

舊壘跡宇佐宮祭八幡大神稱德天皇欲讓

位干月削道鏡使和氣清磨告宇佐神神託

不許清磨歸奏之道鏡怒配流清磨 採銅

處在小倉山上

豐後國 有木綿山小竹島大友氏曾據此國

肥前國 松浦昔神功皇后西征時釣魚處也

大伴狹手彦入唐時松浦依用姬登山振

領巾惜別以招舟見者悲之因名其處曰領

巾振山 松浦明神即神功皇后之靈也一

名鏡宮又曰聖武天皇時太宰大貳藤原廣

嗣謀反勅大野東人伐之廣嗣出自筑前怡

土城相戰于板櫃敗走乘舟振鐸欲征異國

逢惡風不能進遂亡其靈為崇故祭之松浦

明神鏡宮明神板櫃明神皆是也平戶亦在

松浦中遣唐船之歸朝者不得到筑前博多

則著平戶河上社祭八幡大神淀姬宮祭

大帶姬是神功皇后妹也長崎近年番船及

唐船往來之港也長崎外三里許有湊曰福

田

肥後國 阿蘇宮是阿蘇津彦之社也 昔八

十梟帥不順王命日本武尊西征誅之平之

菊池氏在此州久矣建武以來菊池武重

子武光通志于後醍醐後村上兩帝奉皇子

為征西將軍宮連破少貳大友等兵其威風

註疏本草及韻書者并レ按レ本邦所有者則其
字有實者有假用者有作倭字者有用俗號者
精詳之則有可議者倉卒有難改正者今姑以
初心記之何遺漏不多哉或古有而今無者或
古無而今有者或同類異形者或一物異名者
或異類同名者或聞名未見者或見而未知名
者皆難一端言之庶幾察之若夫草木蟲魚者
不遑枚舉貴邦之所編撰卿藥集成嘗得見
之其間彼此或有無或異同其亦可准知之乎
行人趣裝太早餘喚來音

本朝年中行事畧

正月

元日 四方拜 朔日寅時天王唱屬星名拜
天地四方以禳年灾祈福祚

供御藥 獻屠蘇酒神明白散度嶂散

朝賀 辰時群臣着礼服侍天王于大極殿

奏七曜曆 獻冰樣 以冰厚薄上歲豊凶謂

之冰樣獻腓赤腓赤者魚名 獻鐸鑼餽飽索

餅桂心等

奏國標國標者處名在大和國吉野山其地出

年魚唱歌吹笛而奏焉

賜百官宴

內侍處御供 內侍處在禁中神鏡所在也昔

天照大神以鏡授天王示齊明潔清之心歷代

傳以為大寶天照大神者天王之祖神也供物

每月朔皆同

立春日 供新汲水曰弱水

上子日 獻七種菜

子日遊 野遊曳推松

上卯日 大學寮獻御杖長五尺三寸若于束

謂之卯杖杖頭刻五行獸形祝之掃邪魅

二日 二宮大饗 群臣賀后宮東宮賜其饗

朝覲 天王行幸太皇及太后宮

三日 視告朔 天王覽百官行事之所錄

叙位 授群臣位階

七日 白馬節會 兵部省奏弓又獻青白毛

馬

八日 女叙位 授宮女位階

十一日 除目 任百寮内外官

十五日 獻赤豆粥及七種粥

十六日 踏歌 召洛中男女善謳者相分舞

踏以祝年甫謂之男踏歌女踏歌各賜祿

十七日 射礼 行幸豐樂院覽之

十八日 賭弓 勝者令負者飲酒以罰之尤

大將右大將監之

廿一日 内宴 天王在仁壽殿使文人賜題

作詩事畢有宴

晦日 神祇官獻御贖物 每月有此禮

作人形代身以除災蓋贖其罪之意也

是月有外記政始 吉書始等之儀且有國忌

日及浮屠修法等事始畧之

二月

上丁日 釋奠 八月亦同

上申日 春日祭 春日山一名三笠山在大

和國天兒屋根神所居也此神者藤原氏之所

自出也号曰春日明神

上卯日 大原野祭 大原野在山城國移春

日神于此昔王都在和州後迁都城州時世世

藤原氏女為皇后夫人以春日路遠故祭祀大

原野

四日 祈年祭 祈諸州靈社

十一日 列見 召見六位以下有藝能者

廿五日 北野忌日 菅原贈相國之忌日也

其靈為北野天滿自在天神故菅族之子弟行

其事北野在王城北

位祿定 考群臣奉勤而慰其勞賜祿

三月

三日 揚灯干北山天王祈北辰号曰御灯

曲水宴 群臣侍 御前賦詩流盃干水面取

飲之是日供艾餅

中午日 石清水臨時祭 石清水在城州男

山一男鳩嶺祭八幡大神

四月

朔日 更衣 改綿衣著袂衣

上卯日 三輪祭 三輪山在和州祭大物主

神也一說云此神者素盞烏神之子素盞烏者

天照大神之弟也

同日 稻荷祭 稻荷山在城州此神化翁負

稻故名亦是王都護神

上申日 平野祭 有八姓祖神在城州

同日 松尾祭 與日吉神同

上酉日 梅宮祭 橘氏之祖神也在城州

四日 廣瀨龍田祭 二社共在和州即風神

也祈之除風水災

八日 灌佛

中申日 日吉祭 日吉在近江國比睿山神

也 俗號山王

中酉日 賀茂祭 賀茂在城州此祀雷神也

世世以為王城守護

中子日 吉田祭 與春日神同 吉田在城

州

北八日 駒牽天王素武德殿見馬并射

晦日 卒川祭 以三枝花飾酒樽以祀故号

三枝祭 卒川在和州

五月

三日 献菖蒲

五日 端午節會

尤右近馬場射騎 自三日至六日行之尤右

大將奉行之

賑給 賜貧民米塩有差

着欽政

檢非違使赴東京沙汰罪囚

六月

供忌火飯 忌不淨之火也

供醴酒 自是月至七月盡

十日 御躰卜 神祇官人占 天王有禎

十一日 神今食 天王幸中和院奉天照大

神手躬調齋膳以祭之

十四日 祇園御靈會 祇園在城州祭素盞

鳥神之處也

晦日 大袂 百官聚于朱雀門而被解

同日 鎮火祭 卜部氏祭王城四隅以掃火

難

同日 道饗祭 除疫癘也

同日 施米 賜王城郭外山寺貧僧米鹽有

差

七月

七日 供索餅 乞巧奠

十四日 盂蘭盆

相撲 諸州貢有膂力者 天王幸仁壽殿觀其
角力勝負祈年穀奉幣 二月今月奉幣帛于

群社

八月

八朔風俗 古無此儀四百年來特為佳節

上丁日 釋奠 與仲春同

四日 祭北野天神即管靈也

十一日 定考 六位以上可昇進者擇才藝

言行恪勤以賜爵位

十五日 石清水放生會

詔使赴男山有宣命祭八幡大神大神者應神

天王之靈也一男譽田天皇父曰仲哀母曰神

巧昔現于豐前國宇佐宮清和天王時移來男

山石清水效驗炳然爾來詔與天照大神并為

宗廟其餘群祀皆為社稷立八色幡故曰八幡

常託夢令放生于諸國於是到處建此祠放縱

魚類遂使男山下河禁殺生

十六日 駒牽 信濃甲斐武藏上野等國貢

馬若干匹天王出南殿見之

九月

七日 不堪田奏 諸國田畝荒損處錄以奏

之勤其實免祝三分一

九日 重陽宴 賜臣僚菊酒又賜鮓魚又頭
上梳菜奠

十一日 例幣 自一日至今日僧尼重輕服
輩不聽參內以潔齋故也天王幸神祇官召齋
主中臣忌部卜部有命乃受幣詣伊勢伊勢有
天照大神廟久矣故崇曰伊勢皇大神宮俗謂
之內宮其後崇大神孫天瓊杵尊于同國度會
宮亦曰伊勢皇大神宮俗謂之外宮每年發遣
奉幣使故曰例幣齋主者掌神祇者也中臣忌
部卜部皆姓氏也此三氏預神職者也

撰蟲 宮人行王城西菟我野捕秋蟲入于籠
以獻之俗呼曰鈴蟲若蟋蟀之屬也

十月

朔日 更衣 改袂衣單衣著綿衣
上亥日 獻餅

五日 射場始 天王幸弓場殿自射侍臣亦
射之龙文右武之道也

同日 殘菊宴詔群臣賦詩賜酒
初雪見參 初雪降時侍臣入內

十一月

中務省獻明年之曆

朔且冬至 天王御南殿受群臣賀

上卯日 相掌祭 遣奉幣使于有名之神祠

同日 祭筑紫宗像神 素盞烏之子也

中丑日 五節 擇宮女令歌舞其曲有五段

故曰五節而舞女五人

中寅日 鎮魂祭

中卯日 新嘗祭 供新穀于神

天王一世一度所行曰大嘗會每歲所行曰新嘗會專祀天照大神

中辰日 豐明節會 天王以新穀胙自嘗又

頒賜群臣

十二月

十九日 佛名 讀佛名經或三夜或一夜以

僧有戒臘為導師

下午日 御髮上 收天王梳髮斷屑燒棄之

于主殿察前

大寒日 立土牛童子像 陰陽師造五色土

牛童子青立東門赤立南門黑立北門白立西

門每門加黃牛 除疫疾且勸農事

荷前 撰日以今年所貢物先薦于陵墓以奉幣帛內侍處神樂 管絃鼓吹以祝神鏡所在且又有謳歌天王亦時時自有度曲
晦日 大夜
是夜追儻

年中行事詳于江家次第文甚多今摘其十之一而已大江匡房為太宰帥此人撰次第

冠禮

有太子冠禮有公卿大夫冠禮有士庶人冠禮皆通曰元服太子初冠時左大臣或右大臣或

外祖父外舅理髮攝政或関白加冠其沐器竹皮刀櫛梳剪刀之類皆備矣式制載在衣服令及西宮記文繁不及此 禮畢 叙爵

公卿大夫之子初冠時其華族巨理髮加冠或代冠以烏帽子烏帽子之品有立烏帽子有風折烏帽子少年有透額冠有小結烏帽子庶人著小折烏帽子故呼元服曰烏帽子著

婚禮

天王納后太子娶妃其儀貴重載在藤原相所撰婚記不可勝書

士大夫嫁娶先通媒妁，相約乃消吉日納幣，或金銀衣服絹布酒肴，隨家豐儉有差。及嫁前日，遣婦人器財諸具，其日輿及夫門，則夫家老或子弟或親族出迎之。婦家老授輿，夫家之人掛手于轅，以入。又一人授貝桶，夫家之人受之，婦入奧，婿相見，親族男女侍焉，具飲膳甚盛。酒巡，教獻其夜，或三夜，婿舅互往來，有相見之賀。古禮尤嚴重，近世疎畧，庶人之儀有差。

喪禮

天王崩，太子居倚庐，百寮吞聲，過密八音，官命固三閔，戒嚴先命，造陵司，次命裝束司，葬送有日。太子素服，群臣百官皆凶服。古昔有三年喪，三月喪短長之奏議，近世世多用浮屠事，公卿大夫之喪有差，亦是近世使浮屠行之喪畢，奏除服，詔許之，於是入于禁中。古有陵有墓，皆壙埋以封樹，且立石以誌焉。逮浮屠事或茶毘，或掩土，皆非古禮也。

祭禮

天王在位之際，一度大祀，謂之大嘗會，先享天

神曰悠紀次享地祇曰須機一作基本朝昔人比之漢之郊祀其餘祭祀于群神皆為社稷也水旱風疫悉有感應

即位之初奉幣告于諸陵以先王有功德故撰定以為陵教是表奉先之禮也

諸神之中稱大明神者大槩用牲猪鹿雞犬魚鳥之類也奉之者不茹葷致齋謂之內清淨散齋謂之外清淨宗廟之初天照大神天瓊杵神次八幡大神祭天照大神時合祭先王及父祖浮屠之預神職者稱曰供僧以誦經陀羅尼

代被詞祝文以菓蔬麵餅等代牲畜故近世祭祀與佛事不相異神遊時輿舉幡捧戟以夾路而行輿教依社例有少奉之者良賤老弱假異樣形先後列步見者滿街所謂祇園會春日祭等之屬皆是也漢世遊衣冠之例乎右四禮儀載布于本朝諸書今抽其万一右日本人物地理節序并四札儀等因朝鮮官使申竹堂之求而附李知事投之

寬永二十年八月十三日 春奈

考槃

事跡考終

丁未正月吉日

荒川宗長

右日本國事跡考一冊小刊本者借寺本氏寫之

文政十丁亥年春三月九日於宇土郡網田

邑起筆同月十八日訖之向九日中村直衛

假名点

薰稿錄卷之五十九終

薰稿錄卷之拾壹終

